

蚕業があったから

日本の近代化を支えた伊達の蚕種製造、養蚕・製糸業

蚕業からつながる現在

現

在の伊達市の風景を眺めると、一面に桃畑や田んぼが広がっています。阿武隈急行線の車窓や相馬福島道路から眺める景色は伊達らしい美しさを感じることができます。また、四季折々に楽しめるフルーツ、メリヤスなどの産業、市内各地に保存継承されている和太鼓など、さまざまなものに目を向けると伊達ならではのものに出会うことができます。

こうした伊達ならではの風景や産業、伝統芸能は偶然の産物なのでしょうか。一つ一つはつながっていないように見えますが、実はつながっているのかもしれない。昔にタイムスリップして伊達市を見ていきましょう。400年ほど前に本格化した蚕業。伊達市全体に広がり、蚕業のまちとして栄えた時代から紐解くと、現在にもつながる蚕業の名残を感じることができるとは思いませんか。

ここを知ってほしい③ Please know here

蚕種本場って？

安永2年(1773)に江戸幕府より信達39カ村に「蚕種本場」を名乗ることが許されました。この称号は、現在のJISマークのようなもので蚕種の品質を証明するものです。この称号を得るために、幕府に冥加金180両を取めた記録が残っていることから当時の伊達地方の繁栄が伺えます。



「新版奥州本場養蚕手引書語録」より蚕種取の場面

ここを知ってほしい④ Please know here

伊達地方蚕業分布図(大正期)

伊達地方は江戸時代中期以降から大正期にかけて、地域の特徴を生かして、蚕種、養蚕、製糸、真綿、製紙、機織物と分業化された蚕都が形成されました。蚕業をとおして町や村が発展し、各地域の街並みを作っていました。これらの地名を使った「機織り歌」が残されています。



ここを知ってほしい① Please know here

江戸から昭和までの繭の歴史

伊達市では卵を取るために使用した江戸時代中期から昭和50年代までの繭を途切れることなく収蔵しています。200年に渡る繭の変遷がたどれるのはここだけかもしれません。蚕種屋さんは蚕種の品種改良に力を尽くし、「又むかし」「川久種」「赤熟」「青熟」などの多くの優良品種を作りました。



繭の見本

ここを知ってほしい② Please know here

養蚕技術の研究でも先進地

養蚕技術の研究でも先進地であり、多くの養蚕家を輩出しましたが、なかでも梁川村(当時)の中村善右衛門は、嘉永2年(1849)に養蚕専用の寒暖計「蚕当計」とその使用法を書いた「蚕当計秘訣」を発表しました。それまで勘に頼っていた蚕の温度管理が、蚕当計によって誰でも標準温度で飼育できるようになり、日本の養蚕業は飛躍的に向上しました。



蚕当計秘訣(左)、蚕当計(右)



さんたね 蚕種本場のブランド

第一章

蚕種：蚕の卵は長径1.3ミリ、短径1.0ミリほどとても小さい

今から400年以上も前に起きた一つの転機。

そのきっかけから、東北の蚕都へ。

蚕種(蚕の卵)は「奥州種」としてブランドとなった。

始まりから全盛期へ

現 在は、果樹栽培が主な産業の一つとなつていますが、近世を通じて伊達市を含む

一帯の地域では、蚕業が発展し、東北地方の蚕都として栄えました。



また、伊達地方が蚕種本場となった大きな要因に阿武隈川があります。氾濫のたびに流れ込む肥沃な用土、水はけの良い砂土は、田には不適でも桑木の栽培には好適地でした。伏黒・栗野・梁川など阿武隈川沿岸は蚕種製造の中心地となり、蚕を育てる養蚕や繭から糸をとる製糸は伊達地方全域に広がりました。さらに副産物として、真綿製造は保原、蚕種製造に必要な紙は小国、山舟生、白根、機織りは川俣と、特色ある地域が形成されました。蚕にかかわる仕事で一本化された伊達地方は、蚕都と呼ばれるにふさわしい地域となりました。

蚕種本場のブランド力

幕 末の開港後は、伊達の蚕種と生糸の多くが

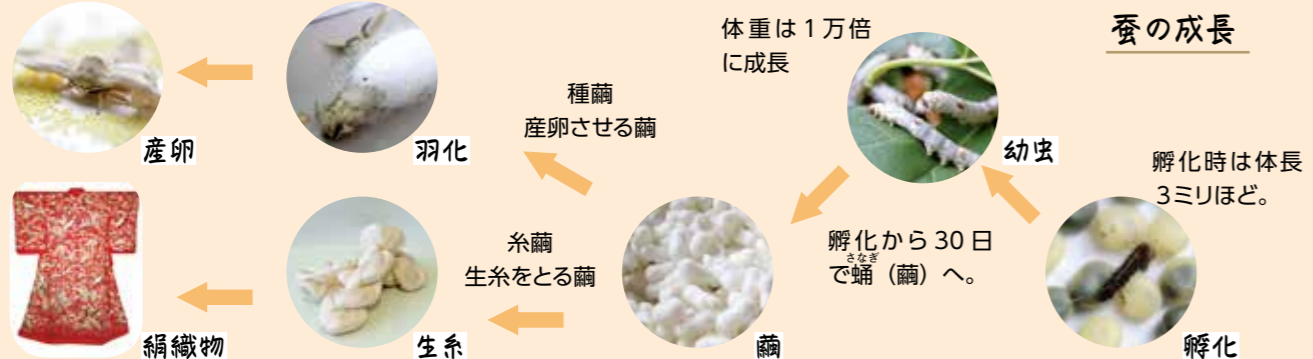
横浜に運ばれ、海外に輸出されました。輸出高の40〜70%を占める生糸によって得られた収入は、明治の近代化を大きく推し進めました。この輸出生産に使われた蚕種の多くが江戸期より伊達で作られた品種でした。

明治中期以降は、世界遺産となった富岡製糸場や岡谷の製糸場など、上州や信州の大型の器械製糸による生糸生産が主力となりますが、それらに使われた蚕種にも、伊達地方から派生したものが多くありました。蚕種本場のブランド力は明治以降も大きな存在であり続けました。

蚕種屋さん

蚕の卵を製造、販売する仕事です。蚕種の品質は繭の品質に大きく影響することから、蚕種屋さんは、蚕業の根幹に当たります。

蚕の成長





あべ としお 阿部 俊夫さん - profile -

福島県歴史資料館の学芸員として長きにわたり古文書の整理を専門に勤めた。現在は、保原歴史文化資料館の学芸員として、これまでの経験を生かして、伊達市に残る古文書の調査・整理を行っている。

(※) 当時の1両は、江戸時代の時期によって価値が変わりますが、現在の価値で5～30万円と考えられます。

江戸時代、元禄（1688）前の頃から、蚕種本場のブランドを契機に伏黒や梁川の蚕種が信州辺りまで販路を拡大し賑い始めます。大きな要因の一つは、幕府により製糸を国内生産に切り替えたことです。江戸時代の資料によれば、伊達地域のお祭り「長岡天王祭」では、生糸の市が開かれ、1万5千両（※）もの取引があったとされています。それが京に運ばれる「登せ糸」として西陣織の原料になりました。また、近江

国（滋賀県）の成田思齋が文化11年（1815）に書いた「蚕飼絹飾大成」では、1軒の養蚕農家の製糸や真綿の売り上げが300両ほどになることさえ珍しくなく、伊達の生糸の生産額は全国の半分以上を占めたとも書かれています。当時は大きな蚕種屋さんが400戸ほど、小さな蚕種屋さんも含めると3千戸ほどもあったとされます。繭を作る家はその何倍もあったでしょうから、間接的に関わる大工や紙すきなど、養蚕を基盤にして派生する産業が発達したまちだったのではない

史料から伝わるすゝこ

伊達市保原歴史文化資料館学芸員の阿部さんに聞く伊達の養蚕業

伊達の養蚕業のすゝこ

江戸時代、元禄（1688）

前の頃から、蚕種本場のブランドを契機に伏黒や梁川の蚕種が信州辺りまで販路を拡大し賑い始めます。大きな要因の一つは、幕府により製糸を国内生産に切り替えたことです。江戸時代の資料によれば、伊達地域のお祭り「長岡天王祭」では、生糸の市が開かれ、1万5千両

国（滋賀県）の成田思齋が文化11年（1815）に書いた「蚕飼絹飾大成」では、1軒の養蚕農家の製糸や真綿の売り上げが300両ほどになることさえ珍しくなく、伊達の生糸の生産額は全国の半分以上を占めたとも書かれています。当時は大きな蚕種屋さんが400戸ほど、小さな蚕種屋さんも含めると3千戸ほどもあったとされます。繭を作る家はその何倍もあったでしょうから、間接的に関わる大工や紙すきなど、養蚕を基盤にして派生する産業が発達したまちだったのではない

▼古文書の整理を進める阿部さん



でしょ
うか。
現在で
例える
と豊田
市や日
立市の
ような
産業城下町だったと思います。

現在残る養蚕の香り

現在は、養蚕の面影を見ることは少ないと思いますが、市内を歩くとニットや繊維の工場など、養蚕から派生した産業が今も見られます。また、農家住宅では兜造りの屋根が特徴の家が数多く見られます。これらは養蚕をするために建てられたものです。伊達市には、養蚕に関する用具や古文書など、かつての養蚕業がわかるものが膨大に残っており、これは素晴らしいと思います。これらの資料を紐解くと現在のまちがどのように発展して今につながっているのかわかります。養蚕があったから現在につながっているということを感じてほしいと思います。



かいこさま お蚕様・・・「さま」

第二章

明治後期の伊達市前川原付近、一面に桑畑が広がっていた。

農家として生産する農産物や飼育する家畜に「様」とつけるものがあるのでしょうか。それほど大事に愛情を持って育てていた。

「お蚕様」といわれる由縁

昭和50年代頃までは市内のいたるところで養蚕が行われていたので、「お蚕様」という言葉を聞いたことがあるかもしれません。なぜ昆虫を「様」というのでしょうか？

蚕は家蚕とも呼ばれ、野生で生きていけない家畜化された虫です。人間の管理なしでは生きることのできない蚕を、養蚕農家は愛情を持って育て「お蚕様」「蚕殿様」と呼んでいました。

江戸時代中期以降から、養蚕のために空気の流れや循環に配慮した兜造りの家が多く建てられました。この家では住居スペースの全てで養蚕が行われ、同じ屋根の下で蚕と人間が一緒に暮らしていました。また、養蚕の成功を願い、市内の神社では「蚕安全」などの御札や、蚕を食べてしまうネズミを追い払うため、猫を神様として祀るなど、信仰の中から「お蚕様」と言われる由縁を感じる事ができます。

ここがすごい① This is amazing

日本一の養蚕技術

江戸時代より蚕の飼育に暖を取り入れ、風土に適した養蚕を行っていました。養蚕用具の「わらだ」も初期の形状は藁で編まれ保温効果が高いものでした。温度を管理する飼育法は明治期に入ると「温暖育」と呼ばれ、養蚕業の先進地としてその技術を学びに日本中から人々が訪れました。さらには養蚕教師を全国各地へ派遣し、温暖育は世に広まりました。



わらだ

ここがすごい② This is amazing

世界に知られた掛田ブランド

明治期までの養蚕農家は家で育てた繭から糸取りをし、その糸を販売することで現金収入を得ていました。左右に振る機能を持つ絡交器付きの糸取り器（奥州座繰り器）で取った糸は質が良いと評判でした。特に明治初期に旧掛田村（霊山町）で考案された「掛田折返し糸」は、欧米へ輸出され高い人気と知名度を誇りました。



糸取り器

ここがすごい③ This is amazing

日本の近代化に貢献

伊達市の特産品「入金真綿」は、人気のあまり注文が多く入金順に納品した事があるとの由来といわれています。女性たちが家の軒先で真綿を作る姿は、生産が盛んな伊達地方ではお馴染みの光景でした。收藏品に真綿作り用具の他にも羽織り・どてらなどの中綿作り用具もあり、真綿はとても身近なものであったといえます。



入金真綿

養蚕の香り



兜造りの家



猫神様（石像）



「蚕」の石碑



保原歴史文化資料館

郷土に関する様々な歴史資料や文化資料の収集・保存・整理を行い、企画展や各種講座を開催している。

【開室時間】9時～17時

（入館は16時30分まで）

【休館日】火曜日、年末年始

【観覧料】大人210円 小中高生100円
保原町大泉字宮脇 265（保原総合公園内）

第三章 文化財として未来へつなぐ

江戸時代から続いてきた養蚕用具は、家の片隅でひっそり眠っていた。昭和50年代には調査のため町の倉庫などに集められたがまた30年の眠りにつくことに。伊達市合併後にその眠りから目を覚まし未来へつなぐ。



1. 蚕を育てるのに使われた「わらだ」が年代ごとに並べられている / 2. 展示室では蚕業に関する用具を見ることができる / 3. 泉原養蚕展示室には5千点以上の用具を収蔵している

文化財に至るまで

昭和

和48年以降、各旧町では町史編纂が行われ、養蚕業に関する用具が集められましたが、それらは伊達市が誕生するまで眠りにつきます。

伊達市誕生へ向かっている頃、「このままではゴミになってしまふ」と、後に国の重要文化財指定に関わる丹治純子さんは、ボランティアで仲間と養蚕用具の整理を始め、それを教育委員会が知ること。教育委員会の判断により、伊達市で収蔵している蚕業関連用具を国の登録文化財とすべく調査分類を始めました。そして2年後の平成20年、2530点の養蚕関連用具が国登録有形民俗文化財となりました。登録はされましたが、

以前と変わらない状態でプレハブ小屋や物置など、市内の各地域にバラバラで保管されていました。

登録文化財の調査の過程で収蔵品は、蚕業に係る全ての用具が揃っており、時代による変遷を知る用具が数多くあるなどその資料価値の高さを知りました。教育委員会は養蚕の歴史を踏まえた上で国重要文化財に相当すると判断し、その指定を目標としました。まずは各地に分散していた用具を旧泉原小学校に集約し、洗浄、その後分類調査などの仕事を進めました。この間に寄贈された用具を含めて収蔵品は5千点を超えました。始めてから7年を経た平成31年「伊達の蚕種製造および養蚕製糸関連用具」1344点が国重要有形民俗文化財に指定されました。

▼糸車（よりかけ器） 数本の生糸を束ねてよりをかけた糸を作る



養蚕用具から見える暮らし

養蚕用具に関わり続けた丹治さんに伺ったその思い

Q1 養蚕用具の整理を進める上で大変だった事は何ですか。

A1 収蔵用具は全て伊達地方の養蚕農家で実使用されていたものです。本来ならいつ頃誰が何をするためにどう使用したのかを聞き取り調査して、まとめなくてはならないと思います。しかし明治期に使用された用具は尋ねようがなく名称も使い方も分かりませんでした。そこで明治期に書かれた伊達地方の養蚕書や絵・蚕具辞典を手掛かりに調べました。時間がかかり大変でしたが、面白い事にも気付きました。それは卵から孵化した蚕を飼育用の紙に移す事

を辞典では「掃き立て」と書いていますが養蚕書では「なでる」と言いその紙は「撫蚕紙」と呼んでいました。なんて優しい言葉だろうと思いました。民具は辞書に頼らずその地方での呼び名がとても大切です。見逃すところでした。

Q2 数多くの用具から何か発見がありましたか。

A2 収蔵品の多くは木竹藁和紙を使って手仕事によって作られています。網代にきっちり編み込んである笄は百年たつても見事な美しさです。また藪を入れておく藪袋の一つに手紙や古本の和紙を貼り合わせて作った物があ

ります。表に柿渋が塗ってあるのは防水・防カビ対策でしょう。どちらも「とてもいい仕事していますね」と言いたくなるほどです。身近にある材料で生活に必要な道具を工夫しながら作っている当時の暮らしが見えてきます。

Q3 収蔵用具から日本の養蚕の歴史を知る事はできますか。

A3 幕末から昭和期まである蚕種製造用具で分かつと思います。200点を越える産卵用具に着目し、それを年代順に並べるとある年から集約化され同一のものが大量にあります。なぜ？それは明治政府による規則や法律によるものでした。輸出高の一番にある生糸の源流に位置する蚕種の統制は明治政府にとっては必然だったのかも知れません。用具からは国の養蚕政策を知る事ができます。

明治大正昭和と日本の基幹産業であった養蚕業、どんな用具を使ってどんな仕事をしてきたのかその足跡を重要文化財となった用具はこれからも伝えていきます。また用具から気付く人々の暮らし方には「温故知新」未来への指針が示されているように思います。



たんじ すみこ 丹治 純子さん - profile -

旧霊山町の養蚕用具をボランティアで整理を始めたことをきっかけに保存に携わってきた。伊達市合併後は保原歴史文化資料館に勤務。平成24年から泉原養蚕展示室で重要文化財の指定に関わり、保存に努めている。



泉原養蚕展示室

国の重要有形民俗文化財 1,344 点を含め約 5,000 点もの蚕種製造および養蚕、製糸関連用具を収蔵している。
【開室時間】 9 時～17 時
(入館は 16 時 30 分まで)
【休室日】 土日・祝日・年末年始
【観覧料】 無料
霊山町泉原字米田 5 (旧泉原小学校)



1. 明治期の卵を産ませるための産卵用具（蚕種枠）で、一枠に一蛾ずつ入れて真っ暗な中で産卵させる / 2. 明治41年（1809）加藤知正編「蠶業大辞書」この辞書が用具の使い方などを解明してくれた

今も残る養蚕の香り

それは伊達らしい

真面目でひたむきに取り組む姿勢

時代が移り変わり、一面の桑畑から果樹地帯へ変わったけれど、養蚕があったから広がりつながった。

養蚕業を通して日本の一時代を築いた原動力は、一人の力は小さいけれど地域でまとまり、切磋琢磨する風土にあるのかもしれない。

今もなお、伊達で暮らす人々にはその気持ちが受け継がれているのではないのでしょうか。



最終章 唯一無二の存在

蚕種屋の仕事

最盛期には伊達地方に3,000を超す蚕種屋があったが、現在はたった1軒。好きだからつないで続けてきた。

蚕種屋の仕事は、繭の生産者に蚕種（蚕の卵）を供給することです。繭生産者は、最初の仕事である「掃き立て※」を5月20日頃に行う春蚕から9月20日頃までの年に6回の注文に合わせ、蚕種を出荷しています。蚕種は、病気に強く良質の繭を生産するために日本種に中国種を掛け合わせてF1（一代交雑種）の蚕種を作ります。まずは繭を切つてサナギを取り出しオスとメスを分け、蚕室で温

度をかけて羽化させます。羽化したら、午前中のうちに交配させて、午後にはオスを離して、次の日の朝7時頃まで台紙に卵を産ませます。その後、台紙を交換してもう一日かけて残りの卵を取ります。この作業では温度を調整してオスを早めに羽化させ、メスの羽化を待つようにしますが、とても気を使います。

今も続ける理由

蚕種屋は、この辺りにも平成初期までは10軒ほどありましたが、江戸時代には3千軒を超す



富田蚕種製造所
とみた かつひろ
富田 克衛さん - profile -

江戸末期から続く蚕種屋の9代目。現在、全国で蚕種業を営むのは数カ所。個人経営は富田さんだけ。繭生産者には欠かせない蚕種製造を続けている。現在は県内のほか、宮城県、山形県、岩手県の繭生産者に供給している。

※掃き立て：繭生産者の最初の仕事で、種紙についた孵化したばかりの毛蚕を、新しい飼育場に移す作業。

蚕種屋があったそうです。現在では個人経営は国内で私だけとなりました。私で9代目となりますが、高校を卒業する時に親から後を継ぐように言われ自然の流れで跡を継ぎました。やりたいたか深い考えはありませんが、嫌いではなかったです（笑）。若い時は競争が激しかったですが、業界が盛んでやりがいがありました。現在は競争はなく、営利追求も期待できませんが、研究や調べることが楽しみです。また、以前の活気はありませんが、蚕を利用して作るバイオ医薬品や高機能シルク開発が進んでいて、蚕業革命と国の研究機関では言っており、期待しています。

伊達地方は蚕で大いに潤ったのは間違いありません。時代とともに移り変わり、果樹地帯に変わりましたが、蚕をやった気質や誇りは残っているんじゃないかと思っています。



1. 交配の状態を確認する富田さん / 2. 交配のため羽化したオスをメスの羽化に合わせて調整する保冷库 / 3. 卵が産み付けられた保管されている蚕紙は、水につけて卵を剥がして乾燥の後1箱あたり2万粒にして出荷する